

友人関係満足と信頼感および個人志向性・社会志向性との関連 —性差に焦点を当てて—

姜 信善・南 朱里*

Relationship between Satisfaction of Friend-Relationship, Trust and Individual and Social Orientednes

— Focusing on Gender —

Sinsun KANG, Akari MINAMI*

キーワード：信頼感，個人志向性・社会志向性，友人関係満足，精神的健康，性差

keywords：Trust, Individual and Social Orientednes, Friend-Relationship, Mental Health, Gender

問題および目的

従来から「精神的健康」に深く関連する要因として、対人関係が取り上げられてきた。たとえば、黒田、有田、桜井(2004)の研究では、日本の大学生において、自分たちの親友関係を他の親友関係より良いものであると評価する「積極的關係高揚」および、悪くないと評価する「消極的關係高揚」は、絶対的幸福感・自尊感情・充実感と正の関係、抑うつと負の関係が示されている。また、対人関係に起因したストレスフルなイベント、すなわち対人ストレスイベントは、最も遭遇頻度が高いストレスフルな状況であり(Folkman, Chesney, McKusick, Ironson, Johnson, & Coates, 1991; Maybery & Graham, 2001)、青年にとっては、避けられない問題である(Seiffge-Krenke & Shulman, 1993)と指摘されている。このように、青年期において、精神的健康に対人関係が深く関連していることが明らかにされている。では、どのようなことが円滑な対人関係を築くことにつながるのだろうか。

南(2014)の結果から、信頼感および個人志向性・社会志向性が対人関係に影響を及ぼしているということがわかる。それならば、信頼感と個人志向性・社会志向性は、互いに関連し合い、対人関係満足に影響を及ぼすとは考えられないだろうか。

天貝(1995)の研究から、「自分への信頼」および「他者への信頼」は「自己投入(自己定義を実現

し、自己を確認するため、独自の目標や努力を傾注すること)」に影響を及ぼしており、逆に、強い「不信感」は他者に対する内閉化傾向を引き起こす可能性があるとしている。それゆえ、信頼感の有無は、自己に対しての振る舞い方、あるいは、他者に対しての振る舞い方に、何らかの影響を及ぼしているのではないかと推察される。すなわち、信頼感の有無は、個性的で主体的な生き方に向かう「個人志向性」や、社会で共有された規範や関係性を重視し、他者との調和的共存や社会適応に向かう「社会志向性」に影響を及ぼしているのではないかと考えられる。

では、「自己信頼」と「他者信頼」のどちらか一方に偏っている場合、個人志向性・社会志向性にどのような影響を与えるのだろうか。

松永・岩元(2008)の研究では、友人に気をつかったり、友人と群れたりする傾向が高い群を「気づかい群」としている。この群は、場を盛り上げたり、楽しくしようとしたりする傾向も高い。その他の「気づかい群」の特徴として、「対人的信頼感」(谷, 1996)が比較的高い、すなわち、人間関係に基づく一般的な他者に対する信頼感が高いとされている。一方で、「基本的信頼感」は比較的低いとされている。また、友人とより本音で付き合いたいと考えているが、それと同時にお互いに傷つかないようにしたいという気持ちも大きく、友人と適度な距離をとれないとされている(松永・岩元, 2008)。

これらから、「他者信頼」を高く持っても、友人とより本音で付き合いたいと考えている、つま

* 兵庫教育大学大学院学校教育研究科人間発達教育専攻
臨床心理学コース 在学中

り、「他者信頼」が高いだけでは、高い友人関係満足が得られないことが推察される。「他者信頼」のみが高い、すなわち、「他者信頼」が高くて、「自己信頼」が低い場合、個人志向性・社会志向性のバランスがとれず、「社会志向性」に偏ってしまうのではないだろうか。それゆえ、他者や社会との関係性に過剰に意識が向かい、友人関係において、主体性や能動性が低くなるのではないかと考えられる。松永ら(2008)の研究の「気づかい群」は、「他者信頼」は高いが、「自己信頼」が低いのではないかと推察される。

そこで、信頼感と個人志向性・社会志向性が関連し合い、対人関係に影響を及ぼすことが考えられるが、これらの関連について検討した研究はほとんど見当たらない。また、南(2014)から、信頼感および個人志向性・社会志向性が、対人関係に影響を及ぼしていることが示されているが、これらを同時に、対人関係に関連した要因として検討した研究は、ほとんど見当たらない。それゆえ、本研究では、これらを考慮に入れ、調べていくこととする。

信頼感とは自分を信じる「自己信頼」や、他者を信じる「他者信頼」といった心理的側面を示しており、個人志向性・社会志向性は、対人場面における行動が、自分に向かっている「個人志向性」や、他者に向かっている「社会志向性」といった振る舞い方の方向性として捉えることができるだろう。

ここで、信頼感における個人志向性・社会志向性との関連について考えていく。姜・南(2014)における、信頼感に関する予備調査結果から得られた自由記述の回答内容についてみる。

「自己信頼」は、絶対的な自信があり、自分の持つ可能性を信じ、自分に対し誠実に生きるとき自己信頼を得るという「生き方への信念」の内容、自分を正しく理解し、それを認めているとき、自己信頼を得るという「客観的自己理解」の内容、他者から信頼されているという実感から、自己信頼を得るという「被信頼」の内容、他者との比較を通して、他者よりも優れているという実感から、自己信頼を得るという「相対的自己確信」の内容が示された。一方、「他者信頼」は、他者が自分を受容し、信頼していると実感できることから、他者信頼を得るという「被受容」の内容、他者が物理的・精神的に、助けてくれたり支えてくれたりすることから他者信頼を得るという「被援助・被支援」の内容が示された。

このようなことから、信頼感の得られ方には、「自己信頼」および「他者信頼」のそれぞれにおいて、多様な側面があると推察される。それをふまえて考えると、信頼感の個人志向性・社会志向性へのプロセスは、多様であると予想される。したがって、信頼感の多様な側面が個人志向性・社会志向性に異なる影響を及ぼし、それによって、友人関係満足に及ぼす影響も異なると推察される。それゆえ、これらを明確にするために、信頼感および個人志向性・社会志向性が、どのように友人関係満足に関連しているかを、段階的に調べることにより、探索的に検討していくこととする。

また、伊藤(1993b)は個人志向性・社会志向性の発達の研究として、年齢とともに個人志向性得点と社会志向性得点がどのように変化するかを、性差を考慮しつつ、検討している。その結果は、男性は個人志向性優位、女性は社会志向性優位に変化していき、男性の個人志向性優位と女性の社会志向性優位のような性別の差は、青年期で特に顕著であるとされている。ここから、特に青年期において、男女による個人志向性・社会志向性の発達の方向が異なることが示された。この青年期の男女において、個人志向性・社会志向性の発達方向が異なることを考えると、これに及ぼす自己信頼・他者信頼の影響が異なってくるのではないかと推察される。それゆえ、それらを明らかにするため、大学生を対象とし、性差について検討していく必要があるだろう。

岡田(2008)は、精神的健康との関連に、親密な友人関係の重要性が繰り返し指摘され、友人関係は個人の適応や精神的健康に強く影響する重要な社会的関係として注目されてきたとしている。よって、本研究では、対人関係の中でも友人関係を取り上げ、友人関係満足を得るプロセスについて明らかにしていくこととする。

以上のことから、本研究においては信頼感の個人志向性・社会志向性への影響、それらの友人関係満足への影響を、性差を考慮に入れ、検討していくことが全体的目的である。具体的には以下のとおりである。

- ・信頼感の個人志向性・社会志向性への影響(研究1)
- ・信頼感および個人志向性・社会志向性の友人関係満足への影響(研究2)

**信頼感の個人志向性・社会志向性への影響
(研究 1)**

目的

南 (2014) の結果から信頼感および個人志向性・社会志向性の友人関係満足への影響がみられ、友人関係満足を得ることにおいて、信頼感および個人志向性・社会志向性が影響を及ぼしていることが示された。

そこで、友人関係満身に影響を及ぼしている要因同士の関連について、つまり、信頼感の個人志向性・社会志向性への影響を明らかにすることを目的とする。また、これらの影響が、上述したように、男女によって異なることが推察されるため、性別による検討を行う。

方法

【対象者】

大学生、計494名 (男性227名、女性267名)

【調査時期】

2013年11月下旬～12月中旬

【調査内容】

信頼感および個人志向性・社会志向性に関する各項目について、それぞれ「あてはまる」「ややあてはまる」「どちらともいえない」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」の5件法で回答が求められた。

【測定尺度】

(1) 信頼感に関する測定尺度

姜ら (2014) で作成された信頼感尺度が用いられた (Table 1)。

(2) 個人志向性・社会志向性に関する測定尺度

信頼性・妥当性が確認されている伊藤 (1993; 1995) の個人志向性・社会志向性 PN 尺度が用いられた (Table 2)。

Table 1 信頼感尺度

No	項目内容
F1「他者信頼」	
15	他者が、自分に心を開いてくれて、自分を認められるとき
28	つらいときに、他者がそばにいて支えてくれるとき
14	他者が、自分の状態や状況をよく見て、気にかけてくれるとき
8	他者から深刻な悩みを相談されて、他者に深刻な悩みを相談できるとき
27	他者が、自分のことを認めてくれて、自分を認められるとき
9	他者が、自分を受容してくれて、自分を好きだと感じられるとき
20	他者が自分に、誠実な態度で接してくれて、他者に誠心誠意を尽くそうと思えるとき
7	他者から求められて、他者に心を許せるとき
23	他者から、必要とされたり、信じられたりして、自分を肯定的に思えるとき
30	他者が、自分に協力してくれるとき
17	他者から大切にされて、自分を大切に思えるとき
19	他者が自分のやり方を尊重してくれて、他者に本音を言えるとき
11	困っていると、他者が声をかけてくれたり、助けてくれたりするとき
25	他者が、自分にありのままを見せてくれていてと感じて、自分を絶対に嫌わないであろうと安心できるとき
F2「自己信頼」	
12	自分の短所も認めるとき
16	何か譲れない意志を持ち、たとえ一度失敗しても次は成功すると思ひ、めげないとき
22	自分ができることとできないことを知り、納得するとき
29	自分の中に強く志すものがあり、困難なことにも前向きに取り組むとき
5	自分自身を一步引いて観察できるとき
18	自分を大切に思っており、自分の気持ちに嘘をつかないとき
26	自分の判断や行動を誇りに思い、また、それらに対して責任を持つとき
10	過大評価も過小評価もせず、自分の能力をありのまま受け入れるとき
13	自分に対して、自分自身が一番の理解者であると思うとき
F3「相対的自己信頼」	
24	自分が、他者よりも良い環境にいると感じるとき
21	自分の境遇が、他者よりも恵まれていると思うとき
2	自分が、他者よりも良い経歴や生い立ちであると思うとき
6	自分が、他者よりも容姿が整っていると思うとき
3	自分の能力が、他者よりも優れていると感じるとき

Table 2 個人志向性・社会志向性 PN 尺度

- 【個人志向性・社会志向性 P 尺度】**
- 1 S. 人に対しては、誠実であるよう心掛けている
 - 2 I. 自分の個性を活かそうと努めている
 - 3 I. 自分の心に正直に生きている
 - 4 S. 他の人から尊敬される人間になりたい
 - 5 I. 小さなことも自分ひとりでは決められない●
 - 6 S. 他の方の気持ちになることができる
 - 7 I. 自分の生きるべき道がみつからない●
 - 8 S. 他人に恥ずかしくないように生きている
 - 9 I. 自分が満足していれば人が何を言おうと気にならない
 - 10 S. 周りとの調和を重んじている
 - 11 S. 社会のルールに従って生きていると思う
 - 12 S. 社会（周りの人）のために役に立つ人間になりたい
 - 13 I. 自分の信念に基づいて生きている
 - 14 S. 人とのつながりを大切にしている
 - 15 I. 周りと反対でも、自分が正しいと思うことは主張できる
 - 16 S. 社会（周りの人）の中で自分が果たすべき役割がある
 - 17 I. 自分が本当に何をやりたいのかわからない●

- 【個人志向性・社会志向性 N 尺度】**
- 1 I. 周りのことを考えず、自分の思ったままに行動することがある
 - 2 S. 何かを決める場合、周りの人に合わせることが多い
 - 3 I. 自分の性格は、わがままだと思う
 - 4 S. 人の先頭に立つより、多少がまんしてでも相手に従うほうだ
 - 5 I. 個性が強すぎて、人とよくぶつかる
 - 6 S. 人前では見せかけの自分をつくってしまう
 - 7 I. 何ごとにも独断で決めることが多い
 - 8 S. なにか良くないことがあると、すぐ自分のせいだと考えてしまう
 - 9 I. 自分中心に考えることが多い
 - 10 S. 相手の顔色をうかがうことが多い
 - 11 I. 人に合わせるよりは、たとえ孤独であっても自由なほうがよい
 - 12 S. 人の目ばかり気にして、自分を失いそうになることがある
 - 13 S. 困ったことがあると、すぐに人に頼ってしまう

項目番号直後の I, S はそれぞれ個人志向性、社会志向性を示す。また●は逆転項目であることを示す。
 (伊藤美奈子 (1993; 1995) 個人志向性・社会志向性 PN 尺度 (堀洋道監修/山本真理子編) 心理測定尺度集 I 一人間の内面を探る〈自己・個人内課程〉株式会社サイエンス社 p.129-133)

【分析手続き】

まず、信頼感と個人志向性・社会志向性との関連を検討するため、信頼感尺度の下位尺度項目得点と個人志向性・社会志向性尺度の下位尺度項目得点との相関関係を求める。

次に、信頼感が個人志向性・社会志向性に及ぼす影響について検討するため、重回帰分析を行う。

性別による検討を行うため、上述の手続きを、全体、男性、女性を対象として行う。

結果

第一に、被験者全体を対象とした分析結果について述べていく。

信頼感と個人志向性・社会志向性の関連について検討を行うため、まず、相関関係が求められた。相関関係の分析結果は、Table 3-1に示す。

信頼感第 1 因子「他者信頼」と、「個人志向性 N」を除いた全てとの間に有意な正の相関がみられた ($p < .01$)。信頼感第 2 因子「自己信頼」と、「個人志向性 P」、「社会志向性 P」との間に有意な正の相関がみられた ($p < .01$)。信頼感第 3 因子「相対的自己信頼」と、「個人志向性 N」、「社会志向性 N」との間に有意な正の相関がみられた ($p < .01$)。

信頼感が個人志向性・社会志向性に及ぼす影響をより具体的に検討するため、信頼感の下位尺度項目合計得点を独立変数、個人志向性・社会志向性の下位尺度項目合計得点を従属変数とし、重回帰分析が行われた。重回帰分析の結果は、Table 3-2、Figure 1-1 に示す。

① 「個人志向性 P」に及ぼす信頼感の影響

信頼感第 2 因子「自己信頼」においてのみ有意

Table 3-1 信頼感尺度の各因子項目合計得点と個人志向性・社会志向性 PN 尺度の各項目合計得点との相関関係 (全体)

	個人志向性 P	社会志向性 P	個人志向性 N	社会志向性 N
他者信頼	.165**	.468**	-.075	.188**
自己信頼	.235**	.317**	.040	.069
相対的自己信頼	.021	.077	.160**	.123**

** $p < .01$ (両側)

Table 3-2 「信頼感→個人志向性・社会志向性」の重回帰分析の結果 (全体)

	個人志向性 P	社会志向性 P	個人志向性 N	社会志向性 N
他者信頼	.061	.415***	-.137**	.202***
自己信頼	.209***	.103*	.078	-.056
相対的自己信頼	-.028	.001	.163***	.107*
重相関係数 (R)	.242***	.477***	.199***	.218***

*** $p < .001$ ** $p < .01$ * $p < .05$

(注) 数値は標準偏回帰係数 (β) を表す

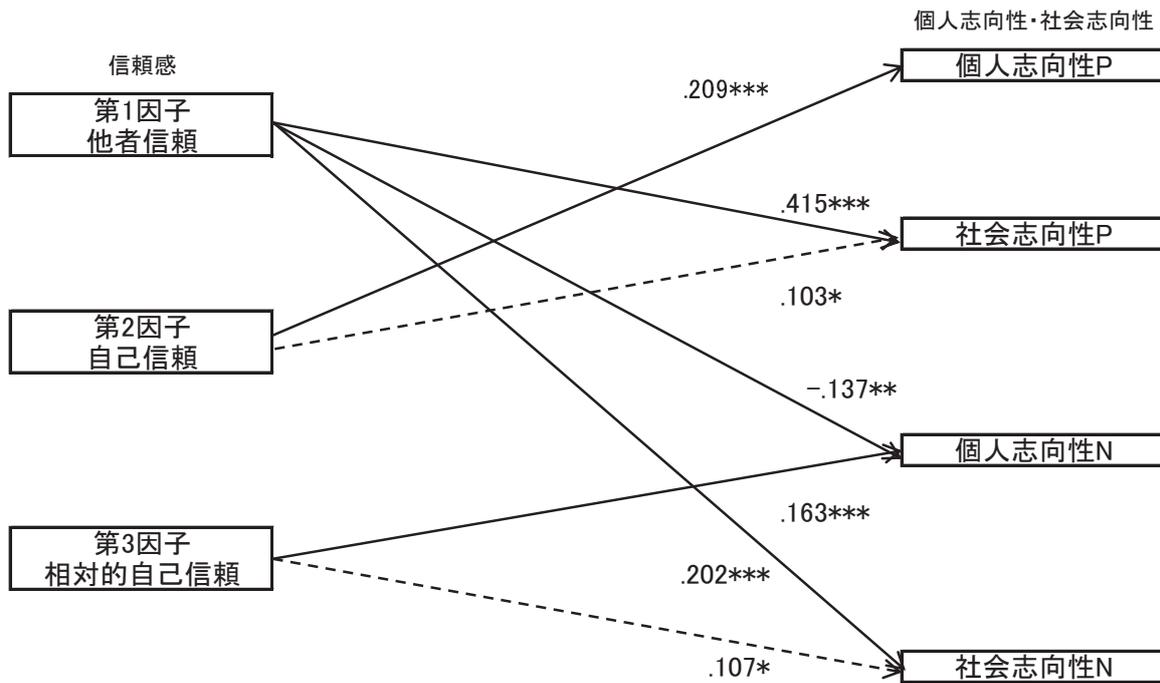


Figure 1-1 「信頼感→個人志向性・社会志向性」の重回帰分析の結果（全体）（各数値はβ係数を表す）

*** p<.001 **p<.01 *p<.05

であり、偏回帰係数は、 $(\beta)=.209(t(490)=4.04, p<.001)$ であった。なお、このときの回帰式全体の説明率は、 $R^2=.05$ であり、有意であった ($F(3,490)=10.18, p<.001$)。

②「社会志向性 P」に及ぼす信頼感の影響

信頼感第1因子「他者信頼」の偏回帰係数は、 $(\beta)=.415(t(490)=8.96, p<.001)$ であり、信頼感第2因子「自己信頼」の偏回帰係数は、 $(\beta)=.103(t(490)=2.20, p<.05)$ であった。したがって、「社会志向性 P」に及ぼす影響は、信頼感第1因子「他者信頼」、第2因子「自己信頼」において有意であった。なお、このときの回帰式全体の説明率は、 $R^2=.22$ であり、有意であった ($F(3,490)=48.03, p<.001$)。

③「個人志向性 N」に及ぼす信頼感の影響

信頼感第1因子「他者信頼」の偏回帰係数は、 $(\beta)=-.137(t(490)=-2.65, p<.01)$ であり、信頼感第3因子「相対的自己信頼」の偏回帰係数は、 $(\beta)=.163(t(490)=3.62, p<.001)$ であった。したがって、「個人志向性 N」に及ぼす影響は、信頼感第1因子「他者信頼」、第3因子「相対的自己信頼」において

のみ有意であった。なお、このときの回帰式全体の説明率は、 $R^2=.03$ であり、有意であった ($F(3,490)=6.73, p<.001$)。

④「社会志向性 N」に及ぼす信頼感の影響

信頼感第1因子「他者信頼」の偏回帰係数は、 $(\beta)=.202(t(490)=3.93, p<.001)$ であり、信頼感第3因子「相対的自己信頼」の偏回帰係数は、 $(\beta)=.107(t(490)=2.38, p<.05)$ であった。したがって、「社会志向性 N」に及ぼす影響は、信頼感第1因子「他者信頼」、第3因子「相対的自己信頼」においてのみ有意であった。なお、このときの回帰式全体の説明率は、 $R^2=.04$ であり、有意であった ($F(3,490)=8.12, p<.001$)。

第二に、全体的結果をふまえた上で、男女別に分析した結果について述べていく。

まず、男性を対象とした分析結果についてみていく。

信頼感と個人志向性・社会志向性の関連について検討を行うため、相関関係が求められた。相関関係の分析結果は、Table 4-1 に示す。

Table 4-1 信頼感尺度の各因子項目合計得点と個人志向性・社会志向性 PN 尺度の各項目合計得点との相関関係（男性）

	個人志向性 P	社会志向性 P	個人志向性 N	社会志向性 N
他者信頼	.320**	.460**	-.109	.143*
自己信頼	.324**	.336**	.056	.070
相対的自己信頼	-.047	.082	.152*	.113

** p<.01(両側) *p<.05(両側)

信頼感第1因子「他者信頼」と、「個人志向性N」を除いた全てとの間に有意な正の相関がみられた（「社会志向性N」との間において $p<.05$, それ以外の全てにおいて $p<.01$ ）。信頼感第2因子「自己信頼」と、「個人志向性P」, 「社会志向性P」との間に有意な正の相関がみられた ($p<.01$)。信頼感第3因子「相対的自己信頼」と、「個人志向性N」との間に有意な正の相関がみられた ($p<.05$)。

信頼感が個人志向性・社会志向性に及ぼす影響をより具体的に検討するため、信頼感の下位尺度項目合計得点を独立変数、個人志向性・社会志向性の下位尺度項目合計得点を従属変数とし、重回帰分析が行われた。重回帰分析の結果は、Table 4-2, Figure 1-2 に示す。

①「個人志向性P」に及ぼす信頼感の影響

信頼感第1因子「他者信頼」の偏回帰係数は、 $(\beta)=.204(t(223)=2.61, p<.05)$ であり、信頼感第2因子「自己信頼」の偏回帰係数は、 $(\beta)=.233(t$

$(490)=2.95, p<.01)$ であった。また、信頼感第3因子「相対的自己信頼」の偏回帰係数は、 $(\beta)=-.141(t(223)=-2.21, p<.05)$ であった。したがって、「個人志向性P」に及ぼす影響は、信頼感尺度の3因子、全てにおいて有意であった。なお、このときの回帰式全体の説明率は、 $R^2=.14$ であり、有意であった ($F(3,223)=12.87, p<.001$)。

②「社会志向性P」に及ぼす信頼感の影響

信頼感第1因子「他者信頼」においてのみ有意であり、偏回帰係数は、 $(\beta)=.409(t(223)=5.45, p<.001)$ であった。なお、このときの回帰式全体の説明率は、 $R^2=.21$ であり、有意であった ($F(3,223)=20.61, p<.001$)。

③「個人志向性N」に及ぼす信頼感の影響

信頼感第1因子「他者信頼」の偏回帰係数は、 $(\beta)=-.240(t(223)=-2.93, p<.01)$ であり、信頼感第2因子「自己信頼」の偏回帰係数は、 $(\beta)=.165(t(223)=1.99, p<.05)$ であった。また、信頼感第3

Table 4-2 「信頼感→個人志向性・社会志向性」の重回帰分析の結果 (男性)

	個人志向性P	社会志向性P	個人志向性N	社会志向性N
他者信頼	.204*	.409***	-.240**	.153
自己信頼	.233**	.090	.165*	-.046
相対的自己信頼	-.141*	-.018	.158*	.095
重相関係数 (R)	.384***	.466***	.244**	.172

*** $p<.001$ ** $p<.01$ * $p<.05$

(注) 数値は標準偏回帰係数 (β) を表す

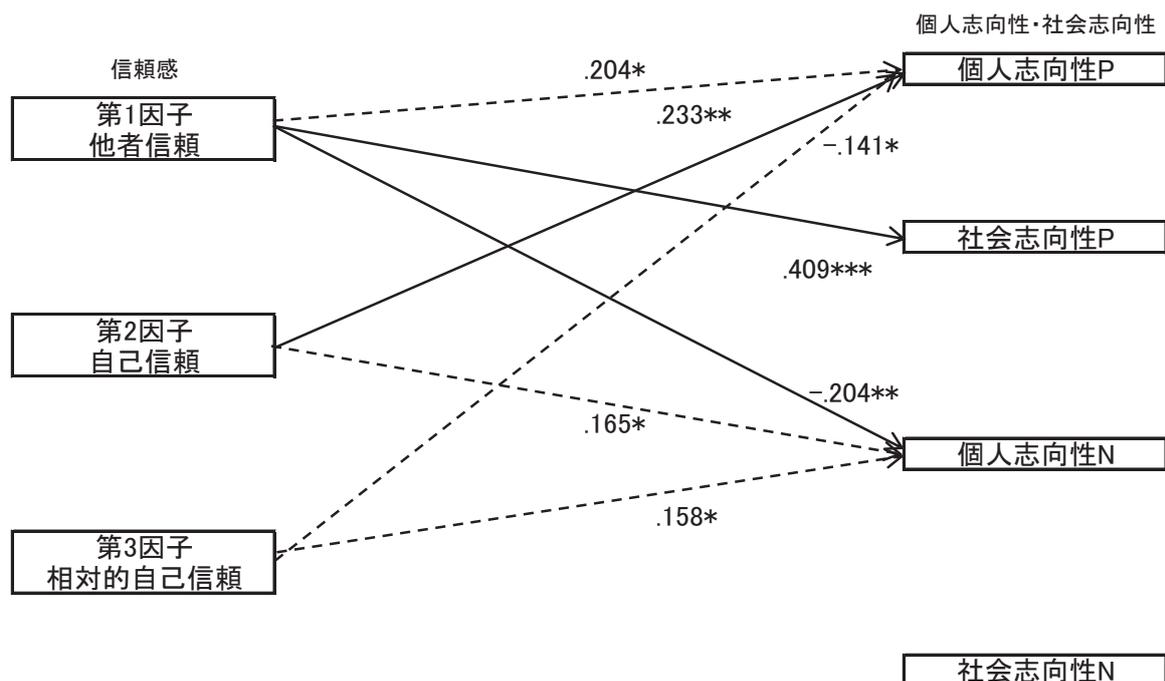


Figure 1-2 「信頼感→個人志向性・社会志向性」の重回帰分析の結果 (男性) (各数値は β 係数を表す)

*** $p<.001$ ** $p<.01$ * $p<.05$

因子「相対的自己信頼」の偏回帰係数は、 $(\beta)=-.158$ ($t(223)=2.36, p<.05$)であった。したがって、「個人志向性 N」に及ぼす影響は、信頼感尺度の3因子、全てにおいて有意であった。なお、このときの回帰式全体の説明率は、 $R^2=.05$ であり、有意であった($F(3,223)=4.71, p<.01$)。

④「社会志向性 N」に及ぼす信頼感の影響

回帰式全体の説明率は、 $R^2=.17$ であり、有意ではなかった。

次に、女性を対象とした分析結果についてみていく。

信頼感と個人志向性・社会志向性の関連について

検討を行うため、相関関係が求められた。相関関係の分析結果は、Table 5-1 に示す。

信頼感第1因子「他者信頼」と、「社会志向性 P」、「社会志向性 N」との間に有意な正の相関がみられた ($p<.01$)。信頼感第2因子「自己信頼」と、「個人志向性 P」、「社会志向性 P」との間に有意な正の相関がみられた ($p<.01$)。信頼感第3因子「相対的自己信頼」と、「個人志向性 N」と「社会志向性 N」との間に有意な正の相関がみられた(順に、 $p<.01, p<.05$)。

信頼感が個人志向性・社会志向性に及ぼす影響をより具体的に検討するため、信頼感の下位尺度項目

Table 5-1 信頼感尺度の各因子項目合計得点と個人志向性・社会志向性 PN 尺度の各項目合計得点との相関関係(女性)

	個人志向性 P	社会志向性 P	個人志向性 N	社会志向性 N
他者信頼	.075	.493**	-.041	.214**
自己信頼	.173**	.298**	.027	.061
相対的自己信頼	.085	.072	.168**	.132*

** $p<.01$ (両側) * $p<.05$ (両側)

Table 5-2 「信頼感→個人志向性・社会志向性」の重回帰分析の結果(女性)

	個人志向性 P	社会志向性 P	個人志向性 N	社会志向性 N
他者信頼	.001	.446***	-.067	.227**
自己信頼	.163*	.108	.029	-.053
相対的自己信頼	.059	.018	.169**	.121*
重相関係数(R)	.183*	.503***	.179*	.248**

*** $p<.001$ ** $p<.01$ * $p<.05$

(注) 数値は標準偏回帰係数 (β) を表す

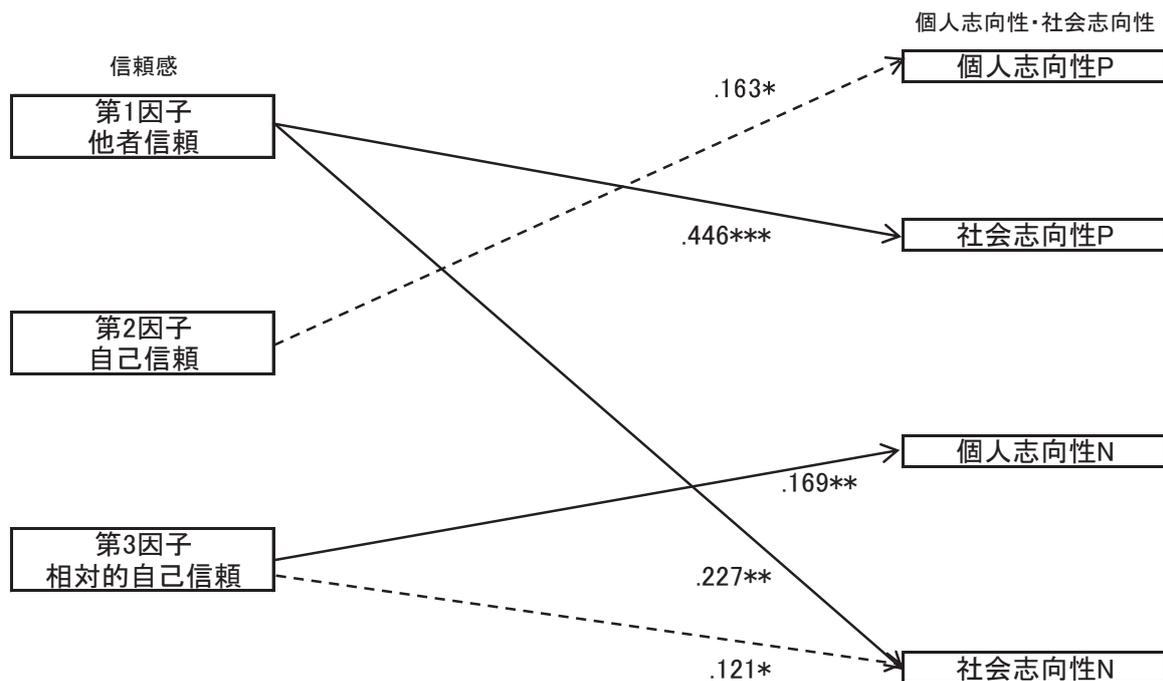


Figure 1-3 「信頼感→個人志向性・社会志向性」の重回帰分析の結果(女性) (各数値は β 係数を表す)

*** $p<.001$ ** $p<.01$ * $p<.05$

合計得点を独立変数、個人志向性・社会志向性の下位尺度項目合計得点を従属変数とし、重回帰分析が行われた。重回帰分析の結果は、Table 5-2、Figure 1-3 に示す。

①「個人志向性 P」に及ぼす信頼感の影響

信頼感第 2 因子「自己信頼」においてのみ有意であり、偏回帰係数は、 $(\beta)=.163(t(263)=2.42, p<.05)$ であった。なお、このときの回帰式全体の説明率は、 $R^2=.02$ であり、有意であった($F(3,263)=3.02, p<.05$)。

②「社会志向性 P」に及ぼす信頼感の影響

信頼感第 1 因子「他者信頼」においてのみ有意であり、偏回帰係数は、 $(\beta)=.446(t(263)=7.60, p<.001)$ であった。なお、このときの回帰式全体の説明率は、 $R^2=.25$ であり、有意であった($F(3,263)=29.75, p<.001$)。

③「個人志向性 N」に及ぼす信頼感の影響

信頼感第 3 因子「相対的自己信頼」においてのみ有意であり、偏回帰係数は、 $(\beta)=.169(t(263)=2.75, p<.01)$ であった。なお、このときの回帰式全体の説明率は、 $R^2=.02$ であり、有意であった($F(3,263)=2.89, p<.05$)。

④「社会志向性 N」に及ぼす信頼感の影響

信頼感第 1 因子「他者信頼」の偏回帰係数は、 $(\beta)=.227(t(263)=3.45, p<.01)$ であり、信頼感第 3 因子「相対的自己信頼」の偏回帰係数は、 $(\beta)=.121(t(263)=2.00, p<.05)$ であった。したがって、「社会志向性 N」に及ぼす影響は、信頼感第 1 因子「他者信頼」、第 3 因子「相対的自己信頼」においてのみ有意であった。なお、このときの回帰式全体の説明率は、 $R^2=.05$ であり、有意であった($F(3,263)=5.73, p<.01$)。

考察

ここでは、信頼感の個人志向性・社会志向性に及ぼす影響について、主な結果を中心に、信頼感尺度の因子ごとにみていく。

第一に、信頼感第 1 因子「他者信頼」について述べていく。

まず、男性を対象とした分析結果から、信頼感第 1 因子「他者信頼」は、個人志向性・社会志向性、両方のポジティブな側面に正の影響、個人志向性のネガティブな側面に負の影響を及ぼしている。「他者信頼」は、“他者が自分に誠実な態度で接してくれて、他者に誠心誠意を尽くそうと思えるとき”な

どの項目内容であり、男性における「他者信頼」には、他者の誠実さを受け止めやすくさせたり、他者に誠実に出来たりする働きがあると考えられる。

つまり、「他者信頼」は、他者の誠実さを受け止め、ありのままの自分を、他者は受容してくれるだろうという安心感につながると推察される。したがって、「他者信頼」は、他者がどのような自分でも受け入れてくれることから、自分が正しいと思うことは主張できるというような「個人志向性 P」につながりやすいと考えられる。

また、「他者信頼」は、他者に対して誠実であろうという態度につながりやすく、それにより、他者の気持ちになって考えるというような「社会志向性 P」につながりやすいのではないだろうか。

次に、女性を対象とした分析結果から、信頼感第 1 因子「他者信頼」は、社会志向性のポジティブな側面、ネガティブな側面のいずれにおいても、正の影響を及ぼした。「他者信頼」は“他者から深刻な悩みを相談されて、他者に深刻な悩みを相談できるとき”などの項目内容である。そこから、女性における「他者信頼」は、他者を大切に思うことにつながる働きと、他者に依存的になることにつながる働きがあると考えられる。このことは、先行研究で、女子は男子よりも友人への依存欲求が高いことが指摘されており(長尾・笠井・鈴木, 2003)、女性の依存欲求の強さは、「他者信頼」の高さによるものと考えられ、本研究の結果は、その裏付けになるといえるだろう。

このことを考えると、女性における「他者信頼」の他者を大切に思しやすい側面が、他者との調和を重んじるというような「社会志向性 P」につながったのではないかと推察される。一方で、「他者信頼」の他者へ依存的にする側面は、様々な場面において、たとえ自分の意に反することでも他者に合わせる人が多いというような「社会志向性 N」につながりやすいと考えられる。

第二に、信頼感第 2 因子「自己信頼」について述べていく。

まず、男性を対象とした分析結果から、信頼感第 2 因子「自己信頼」は、個人志向性のポジティブな側面、ネガティブな側面のいずれにおいても、正の影響を及ぼしていることが示された。

「自己信頼」は、“自分の判断や行動を誇りに思い、また、それらに対して責任を持つとき”などの項目

内容であり、「自己信頼」は、自分の言動に自信を持ちやすくすることが推察される。したがって、男性において「自己信頼」がプラスに働くと、自分の意見や決定に信念を持って生きていくというような「個人志向性 P」につながると推察される。逆に、「自己信頼」がマイナスに働くと、自分の意見や決定にこだわり、自分の思ったままに発言したり行動したりし、他者と意見がぶつかるというような「個人志向性 N」につながるのではないだろうか。

次に、女性を対象とした分析結果から、信頼感第 2 因子「自己信頼」は、「個人志向性 P」にのみ、正の影響を及ぼしている。

このように、男女別に分析結果をみると、男性においては、「自己信頼」が、個人志向性のポジティブ、ネガティブ、両方の側面に正の影響を及ぼしていたが、女性においては、「自己信頼」が、個人志向性のポジティブな側面においてのみ正の影響がみられた。このことから考えると、男性において、「自己信頼」は、自分が正しいとし、周りのことをあまり考えず、思ったままに行動するなど、友人関係にマイナスに働く場合があると考えられる。しかし、女性においては、そのようなマイナスの側面は、有意な影響とは示されず、「自己信頼」は、自分の意見や行動に自信を持ちやすくし、信念を持って生きるなど、プラスに働く側面においてのみ、有意な影響が示された。このことから、男性とは異なり、女性における自己信頼は、過度な自信につながるわけではないと考えられる。

このように、「自己信頼」の個人志向性への影響が、男女によって異なるという結果が示されている。これは、男性、女性の特徴によるものであると推察されるが、今後は、被験者を増やすなどし、性差によるさらなる検討が望まれる。

第三に、信頼感第 3 因子「相対的自己信頼」について述べていく。

女性を対象とした分析結果から、信頼感第 3 因子「相対的自己信頼」は、個人志向性・社会志向性、両方のネガティブな側面にのみ、正の影響を及ぼしている。

本研究においての「相対的自己信頼」は、他者との比較により得られる自己信頼であることから、この場合、自己信頼を得るには劣等感を抱くことなく、他者と比べて自分が優位であることを実感することが重要であると推察される。そこで、「相対的自己

信頼」の個人志向性・社会志向性への影響の結果については、女性の場合、以下のようなことが考えられる。

まず、「相対的自己信頼」の「個人志向性 N」への影響について述べていく。上述したように、「相対的自己信頼」を得るには、他者と比べて、自分が優位であることを実感することが重要であるだろう。したがって、「相対的自己信頼」は、他者に対して、優越感を持ちやすくすることが考えられ、それにより、独断で物事を決めたり、相手のことを考えず自分の思ったまま行動したりする個人志向性のネガティブな側面につながりやすいのではないだろうか。

次に、「相対的自己信頼」の「社会志向性 N」への影響について述べていく。上述したように、「相対的自己信頼」は、対人場面において、劣等感を抱くことを避けようとしやすくすることが推察され、友人に素の自分を見せることを嫌い、人前では見せかけの自分をつくってしまうという社会志向性のネガティブな側面につながりやすいと考えられる。

本研究の結果は、これらのことによるものと解釈される。

信頼感および個人志向性・社会志向性が友人関係満足に及ぼす影響についての検討(研究 2)

目的

研究 1 では、信頼感が個人志向性・社会志向性に及ぼす影響がみられた。そこで、信頼感および個人志向性・社会志向性が友人関係満足に、どのような影響を及ぼすかを検討することを目的とする。また、これらの影響は、上述したように、男女によって異なることが推察されるため、性別による検討を行う。

方法

【対象者】

大学生、計 494 名(男性 227 名、女性 267 名)

【調査時期】

2013 年 11 月下旬～12 月中旬

【調査内容】

信頼感、個人志向性・社会志向性および友人関係満足に関する各項目について、それぞれ「あてはまる」「ややあてはまる」「どちらともいえない」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」の 5 件法で回答が求められた。

【測定尺度】

(1) 信頼感に関する測定尺度

姜ら (2014) で作成された信頼感尺度が用いられた (Table 1)。

(2) 個人志向性・社会志向性に関する測定尺度

信頼性・妥当性が確認されている伊藤 (1993 ; 1995) の個人志向性・社会志向性 PN 尺度が用いられた (Table 2)。

(3) 友人関係満足に関する測定尺度

姜ら (2014) で作成された友人関係満足尺度が用いられた (Table 6)。

【分析手続き】

南 (2014) において信頼感および個人志向性・社会志向性と友人関係満足との相関関係が示された (Table 7-1, 7-2, 7-3)。それゆえ、ここでは、信頼感および個人志向性・社会志向性が、友人関係満足に及ぼす影響について検討するため、重回帰分析を行う。性別による検討を行うため、上述の重回帰分析を、

全体、男性、女性を対象に行う。

結果

第一に、被験者全体を対象とした分析結果について述べていく。

信頼感および個人志向性・社会志向性が友人関係満足に及ぼす影響をより具体的に検討するため、信頼感および個人志向性・社会志向性の下位尺度項目合計得点を独立変数、友人関係満足の下位尺度項目合計得点を従属変数とし、重回帰分析が行われた。重回帰分析の結果は、Table 8-1, Figure 2-1 に示す。

①友人関係満足第 1 因子「意志疎通満足」に及ぼす信頼感および個人志向性・社会志向性の影響

信頼感第 1 因子「他者信頼」の偏回帰係数は、 $(\beta)=.368(t(486)=7.24, p<.001)$ であり、信頼感第 3 因子「相対的自己信頼」の偏回帰係数は、 $(\beta)=-.105(t(486)=-2.52, p<.05)$ であった。また、「社

Table 6 友人関係満足尺度

No	項目内容
F1「意志疎通満足」	
22	スムーズに意志疎通が行え、話がはずむし、満足している
14	テンポよく、会話ができるし、満足している
4	冗談を言い合えるし、満足している
23	友人と共通の趣味や話題、盛り上げられるし、満足している
10	一緒にいて、楽しいと感じられるし、満足している
F2「相互的受容・理解満足」	
1	一緒にいて気を遣わず、互いに素を出せるし、満足している
3	自分を分かってくれる、または、相手を分かちあげられるし、満足している
6	何でも、本音で言い合えるし、満足している
15	楽しい時間を過ごせるようにと気を配るが、私は心を開いたりはしないし、満足している
2	互いに、礼儀をわきまえているし、満足している
5	友人に対して、あまり期待しないし、満足している
F3「自己優先満足」	
11	友人がどこかに行くときは、必ず誘ってくれるし、満足している
29	頻繁に遊びに誘われるし、満足している
12	物理的にも、常に友人と一緒にいれるし、満足している
19	相談事などは、必ず自分に言ってくれるし、満足している
F4「関係距離満足」	
28	傷つけないよう、言葉遣いに配慮し、満足している
27	互いに干渉し過ぎず、互いのペースを守ることができるし、満足している
18	互いに、踏み込んでほしいと思える所までは踏み込むという、適度な距離感を保っているし、満足している
24	頻繁に会ってなくても、支え合っていると実感し、満足している
F5「関係維持満足」	
21	あまり乗り気でなくとも、友人からの頼みであれば断らないし、満足している
25	自分の負担になっても、友人からの期待に応えようとするし、満足している
13	友人からの誘いには、無理をしても応えるようにしているし、満足している

Table 7-1 信頼感尺度および個人志向性・社会志向性 PN 尺度と友人関係満足尺度との各因子項目合計得点の相関関係 (全体)

	意思疎通満足	相互的受容・理解満足	自己優先満足	関係距離満足	関係維持満足
他者信頼	.435**	.400**	.222**	.388**	.127**
自己信頼	.258**	.212**	.167**	.253**	.066
相対的自己信頼	-.038	-.110*	.039	.049	.157**
個人志向性 P	.176**	.220**	.102*	.119**	.042
社会志向性 P	.323**	.344**	.211**	.323**	.119**
個人志向性 N	-.044	-.158**	-.107*	-.093*	.047
社会志向性 N	-.007	-.066	.027	.086	.162**

** p<.01(両側) *p<.05(両側)

Table 7-2 信頼感尺度および個人志向性・社会志向性 PN 尺度と友人関係満足尺度との各因子項目合計得点の相関関係 (男性)

	意思疎通満足	相互的受容・理解満足	自己優先満足	関係距離満足	関係維持満足
他者信頼	.490**	.407**	.249**	.390**	.159*
自己信頼	.334**	.255**	.226**	.274**	.132*
相対的自己信頼	.007	-.093	.093	.104	.128
個人志向性 P	.220**	.268**	.131*	.153*	.058
社会志向性 P	.347**	.367**	.273**	.356**	.162*
個人志向性 N	-.055	-.172**	-.134*	-.122	.061
社会志向性 N	-.006	-.046	.017	.041	.145*

** p<.01(両側) *p<.05(両側)

Table 7-3 信頼感尺度および個人志向性・社会志向性 PN 尺度と友人関係満足尺度との各因子項目合計得点の相関関係 (女性)

	意思疎通満足	相互的受容・理解満足	自己優先満足	関係距離満足	関係維持満足
他者信頼	.375**	.386**	.220**	.350**	.181**
自己信頼	.179**	.166**	.119	.219**	.034
相対的自己信頼	-.081	-.128*	-.006	-.007	.194**
個人志向性 P	.153*	.197**	.063	.146*	-.037
社会志向性 P	.294**	.319**	.145*	.285**	.086
個人志向性 N	-.034	-.145*	-.086	-.063	.030
社会志向性 N	-.017	-.095	.044	.110	.220**

** p<.01(両側) *p<.05(両側)

Table 8-1 「信頼感および個人志向性・社会志向性→友人関係満足」の重回帰分析の結果 (全体)

	意思疎通満足	相互的受容・理解満足	自己優先満足	関係距離満足	関係維持満足
他者信頼	.368***	.338***	.129*	.273***	.057
自己信頼	.036	.003	.056	.054	-.045
相対的自己信頼	-.105*	-.148***	.014	-.009	.124**
個人志向性 P	.023	.099	.070	.046	.113
社会志向性 P	.162**	.157**	.085	.152**	.053
個人志向性 N	.043	-.078	-.088	-.036	.028
社会志向性 N	-.075	-.081	.022	.037	.188**
重相関係数 (R)	.478***	.496***	.272***	.425***	.258***

*** p<.001 ** p<.01 * p<.05

(注) 数値は標準偏回帰係数 (β) を表す

社会志向性 P」の偏回帰係数は、(β)=.162 (t(486)=3.20, p<.01)であった。したがって、友人関係満足第1因子「意志疎通満足」に及ぼす影響は、信頼感第1因子「他者信頼」、第3因子「相対的自己

信頼」,「社会志向性 P」においてのみ有意であった。なお、このときの回帰式全体の説明率は、 $R^2=.22$ であり、有意であった ($F(7,486)=20.59, p<.001$)。

②友人関係満足第2因子「相互的受容・理解満

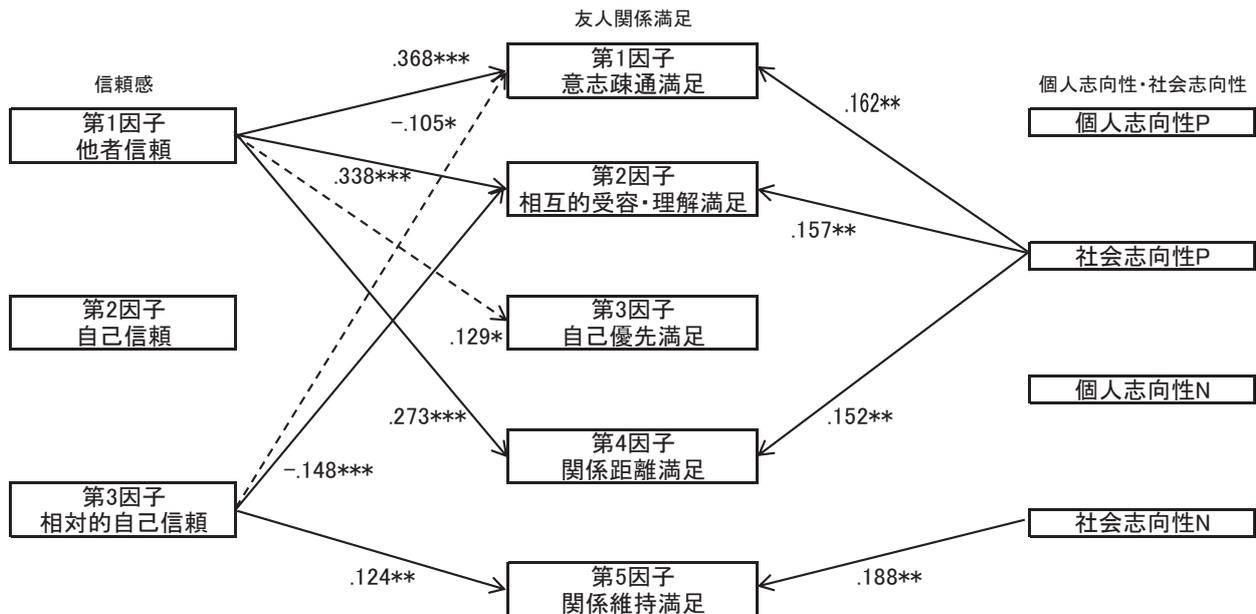


Figure 2-1 「信頼感・個人志向性・社会志向性→友人関係満足」の重回帰分析の結果（全体）
 （各数値は β 係数を表す）
 *** $p < .001$ ** $p < .01$ * $p < .05$

足」に及ぼす信頼感および個人志向性・社会志向性の影響

信頼感第1因子「他者信頼」の偏回帰係数は、 $(\beta) = .338$ ($t(486) = 6.71, p < .001$)であり、信頼感第3因子「相対的自己信頼」の偏回帰係数は、 $(\beta) = -.148$ ($t(486) = -3.60, p < .001$)であった。また、「社会志向性P」の偏回帰係数は、 $(\beta) = .157$ ($t(486) = 3.14, p < .01$)であった。したがって、友人関係満足第2因子「相互的受容・理解満足」に及ぼす影響は、信頼感第1因子「他者信頼」、第3因子「相対的自己信頼」、「社会志向性P」においてのみ有意であった。なお、このときの回帰式全体の説明率は、 $R^2 = .24$ であり、有意であった ($F(7,486) = 22.59, p < .001$)。

③友人関係満足第3因子「自己優先満足」に及ぼす信頼感および個人志向性・社会志向性の影響

信頼感第1因子「他者信頼」においてのみ有意であり、偏回帰係数は、 $(\beta) = .129$ ($t(486) = 2.31, p < .05$)であった。なお、このときの回帰式全体の説明率は、 $R^2 = .06$ であり、有意であった ($F(7,486) = 5.53, p < .001$)。

④友人関係満足第4因子「関係距離満足」に及ぼす信頼感および個人志向性・社会志向性の影響

信頼感第1因子「他者信頼」の偏回帰係数は、 $(\beta) = .273$ ($t(486) = 5.21, p < .001$)であり、「社会志向性P」の偏回帰係数は、 $(\beta) = .152$ ($t(486) = 2.91, p < .01$)であった。したがって、友人関係満足第4

因子「関係距離満足」に及ぼす影響は、信頼感第1因子「他者信頼」、「社会志向性P」においてのみ有意であった。なお、このときの回帰式全体の説明率は、 $R^2 = .17$ であり、有意であった ($F(7,486) = 15.28, p < .001$)。

⑤友人関係満足第5因子「関係維持満足」に及ぼす信頼感および個人志向性・社会志向性の影響

信頼感第3因子「相対的自己信頼」の偏回帰係数は、 $(\beta) = .124$ ($t(486) = 2.72, p < .01$)であり、「社会志向性N」の偏回帰係数は、 $(\beta) = .188$ ($t(486) = 3.40, p < .01$)であった。したがって、友人関係満足第5因子「関係維持満足」に及ぼす影響は、信頼感第3因子「相対的自己信頼」、「社会志向性N」においてのみ有意であった。なお、このときの回帰式全体の説明率は、 $R^2 = .05$ であり、有意であった ($F(7,486) = 4.95, p < .001$)。

第二に、全体的結果をふまえた上で、男女別で分析した結果について述べていく。

まず、男性を対象とした分析結果についてみていく。

信頼感と個人志向性・社会志向性が友人関係満足に及ぼす影響をより具体的に検討するため、信頼感および個人志向性・社会志向性の下位尺度項目合計得点を独立変数、友人関係満足の下位尺度項目合計得点を従属変数とし、重回帰分析が行われた。重回帰分析の結果は、Table 8-2, Figure 2-2 に示す。

Table 8-2 「信頼感および個人志向性・社会志向性→友人関係満足」の重回帰分析の結果（男性）

	意思疎通満足	相互的受容・理解満足	自己優先満足	関係距離満足	関係維持満足
他者信頼	.430***	.317***	.089	.272**	.058
自己信頼	.052	.019	.106	.042	.003
相対的自己信頼	-.105	-.154*	.054	.031	.080
個人志向性 P	-.063	.057	.014	-.042	.062
社会志向性 P	.205**	.207**	.165*	.230**	.116
個人志向性 N	.078	-.051	-.084	-.019	.090
社会志向性 N	-.121	-.084	-.032	-.061	.138
重相関係数 (R)	.530***	.502***	.330**	.443***	.260*

*** p<.001 ** p<.01 * p<.05
 (注) 数値は標準偏回帰係数 (β) を表す

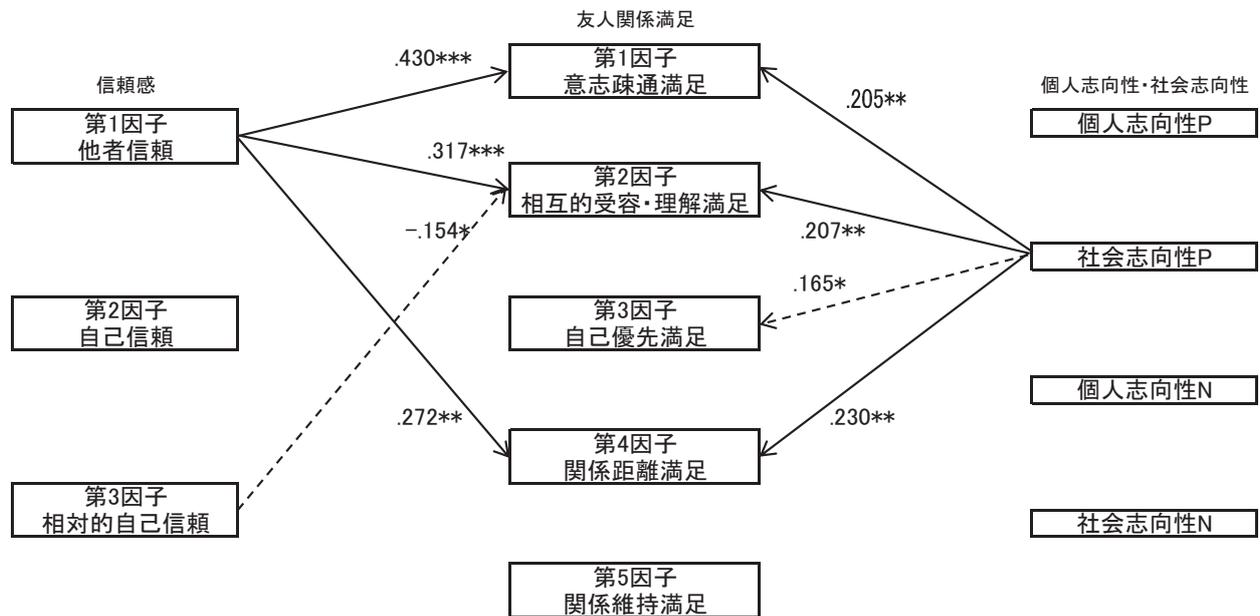


Figure 2-2 「信頼感および個人志向性・社会志向性→友人関係満足」の重回帰分析の結果（男性）
 (各数値はβ係数を表す)

*** p<.001 **p<.01 *p<.05

①友人関係満足第1因子「意志疎通満足」に及ぼす信頼感および個人志向性・社会志向性の影響

信頼感第1因子「他者信頼」の偏回帰係数は、(β)=.430(t(219)=5.42, p<.001)であり、「社会志向性P」の偏回帰係数は、(β)=.205(t(219)=2.76, p<.01)であった。したがって、友人関係満足第1因子「意志疎通満足」に及ぼす影響は、信頼感第1因子「他者信頼」, 「社会志向性P」においてのみ有意であった。なお、このときの回帰式全体の説明率は、R²=.26であり、有意であった(F(7,219)=12.22, p<.001)。

②友人関係満足第2因子「相互的受容・理解満足」に及ぼす信頼感および個人志向性・社会志向性の影響

信頼感第1因子「他者信頼」の偏回帰係数は、

(β)=.317(t(219)=3.92, p<.001)であり、信頼感第3因子「相対的自己信頼」の偏回帰係数は、(β)=-.154(t(219)=-2.49, p<.05)であった。また、「社会志向性P」の偏回帰係数は、(β)=.207(t(219)=2.73, p<.01)であった。したがって、友人関係満足第2因子「相互的受容・理解満足」に及ぼす影響は、信頼感第1因子「他者信頼」, 第3因子「相対的自己信頼」, 「社会志向性P」においてのみ有意であった。なお、このときの回帰式全体の説明率は、R²=.23であり、有意であった(F(7,219)=10.55, p<.001)。

③友人関係満足第3因子「自己優先満足」に及ぼす信頼感および個人志向性・社会志向性の影響

「社会志向性P」においてのみ有意であり、偏回帰係数は、(β)=.165(t(219)=2.00, p<.05)であった。なお、このときの回帰式全体の説明率は、R²=

.08であり、有意であった ($F(7,219)=3.82, p<.01$)。

④友人関係満足第4因子「関係距離満足」に及ぼす信頼感および個人志向性・社会志向性の影響

信頼感第1因子「他者信頼」の偏回帰係数は、 $(\beta)=.272(t(219)=3.25, p<.01)$ であり、「社会志向性P」の偏回帰係数は、 $(\beta)=.230(t(219)=2.93, p<.01)$ であった。したがって、友人関係満足第4因子「関係距離満足」に及ぼす影響は、信頼感第1因子「他者信頼」, 「社会志向性P」においてのみ有意であった。なお、このときの回帰式全体の説明率は、 $R^2=.17$ であり、有意であった ($F(7,219)=7.63, p<.001$)。

⑤友人関係満足第5因子「関係維持満足」に及ぼす信頼感および個人志向性・社会志向性の影響

回帰式全体の説明率は、 $R^2=.04$ であり、有意で

あった ($F(7,219)=2.28, p<.05$) が、偏回帰係数は有意ではなかった。

次に、女性を対象とした分析結果についてみていく。

信頼感と個人志向性・社会志向性が友人関係満足に及ぼす影響をより具体的に検討するため、信頼感および個人志向性・社会志向性の下位尺度項目合計得点を独立変数、友人関係満足の下位尺度項目合計得点を従属変数とし、重回帰分析が行われた。重回帰分析の結果は、Table 8-3, Figure 2-3 に示す。

①友人関係満足第1因子「意志疎通満足」に及ぼす信頼感および個人志向性・社会志向性の影響

信頼感第1因子「他者信頼」の偏回帰係数は、 $(\beta)=.317(t(259)=4.53, p<.001)$ であり、信頼感第3因子「相対的自己信頼」の偏回帰係数は、 $(\beta)=$

Table 8-3 「信頼感および個人志向性・社会志向性→友人関係満足」の重回帰分析の結果 (女性)

	意思疎通満足	相互的受容・理解満足	自己優先満足	関係距離満足	関係維持満足
他者信頼	.317***	.352***	.189*	.235**	.156*
自己信頼	.013	-.007	.027	.064	-.077
相対的自己信頼	-.125*	-.147*	-.025	-.070	.165**
個人志向性P	.091	.146*	.102	.210**	.055
社会志向性P	.128	.103	-.006	.079	-.007
個人志向性N	.013	-.110	-.101	-.076	-.010
社会志向性N	-.032	-.078	.061	.170*	.198**
重相関係数 (R)	.428***	.489***	.249*	.417***	.314***

*** $p<.001$ ** $p<.01$ * $p<.05$
 (注) 数値は標準偏回帰係数 (β) を表す

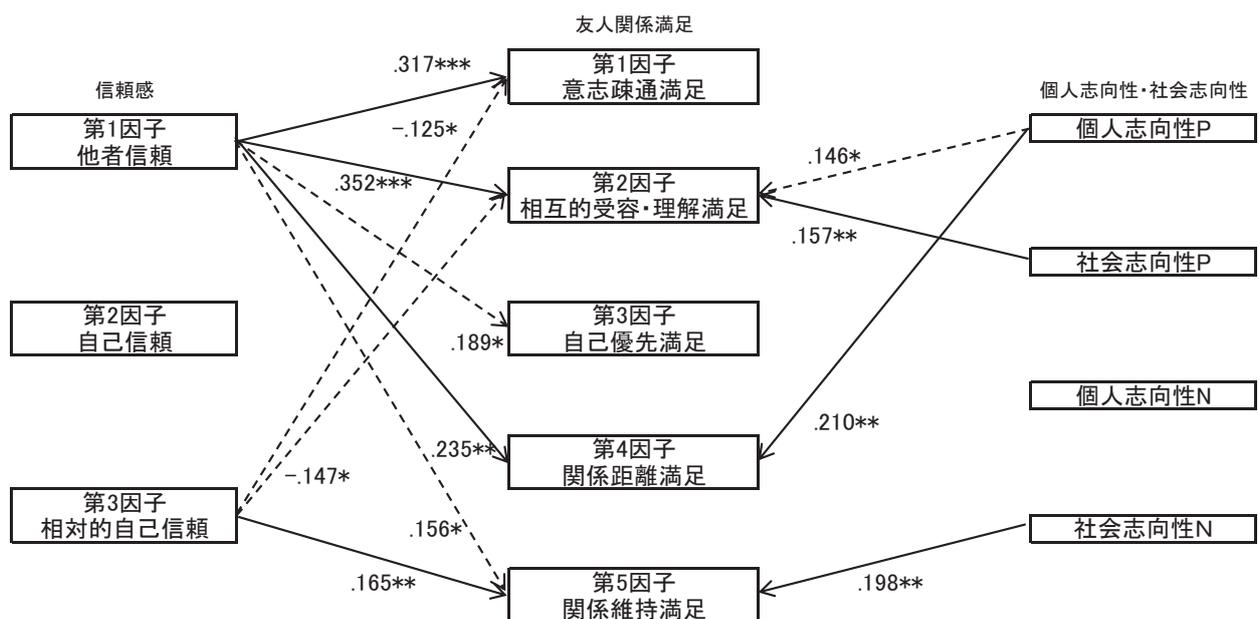


Figure 2-3 「信頼感および個人志向性・社会志向性→友人関係満足」の重回帰分析の結果 (女性)
 (各数値は β 係数を表す)

*** $p<.001$ ** $p<.01$ * $p<.05$

-1.25($t(259)=-2.13, p<.05$)であった。したがって、友人関係満足第1因子「意志疎通満足」に及ぼす影響は、信頼感第1因子「他者信頼」、第3因子「相対的自己信頼」においてのみ有意であった。なお、このときの回帰式全体の説明率は、 $R^2=.16$ であり、有意であった($F(7,259)=8.30, p<.001$)。

②友人関係満足第2因子「相互的受容・理解満足」に及ぼす信頼感および個人志向性・社会志向性の影響

信頼感第1因子「他者信頼」の偏回帰係数は、 $(\beta)=.352(t(259)=5.21, p<.001)$ であり、信頼感第3因子「相対的自己信頼」の偏回帰係数は、 $(\beta)=-.147(t(259)=-2.61, p<.05)$ であった。また、「個人志向性 P」の偏回帰係数は、 $(\beta)=.146(t(259)=2.02, p<.05)$ であった。したがって、友人関係満足第2因子「相互的受容・理解満足」に及ぼす影響は、信頼感第1因子「他者信頼」、第3因子「相対的自己信頼」、「個人志向性 P」においてのみ有意であった。なお、このときの回帰式全体の説明率は、 $R^2=.22$ であり、有意であった($F(7,259)=11.60, p<.001$)。

③友人関係満足第3因子「自己優先満足」に及ぼす信頼感および個人志向性・社会志向性の影響

信頼感第1因子「他者信頼」においてのみ有意であり、偏回帰係数は、 $(\beta)=.189(t(259)=2.52, p<.05)$ であった。なお、このときの回帰式全体の説明率は、 $R^2=.04$ であり、有意であった($F(7,259)=2.44, p<.05$)。

④友人関係満足第4因子「関係距離満足」に及ぼす信頼感および個人志向性・社会志向性の影響

信頼感第1因子「他者信頼」の偏回帰係数は、 $(\beta)=.235(t(259)=3.34, p<.01)$ であり、「個人志向性 P」の偏回帰係数は、 $(\beta)=.210(t(259)=2.77, p<.01)$ であった。また、「社会志向性 N」の偏回帰係数は、 $(\beta)=.170(t(259)=2.36, p<.05)$ であった。したがって、友人関係満足第4因子「関係距離満足」に及ぼす影響は、信頼感第1因子「他者信頼」、「個人志向性 P」、「社会志向性 N」においてのみ有意であった。なお、このときの回帰式全体の説明率は、 $R^2=.15$ であり、有意であった($F(7,259)=7.77, p<.001$)。

⑤友人関係満足第5因子「関係維持満足」に及ぼす信頼感および個人志向性・社会志向性の影響

信頼感第1因子「他者信頼」の偏回帰係数は、 $(\beta)=.156(t(259)=2.12, p<.05)$ であり、信頼感第

3因子「相対的自己信頼」の偏回帰係数は、 $(\beta)=.165(t(259)=2.68, p<.01)$ であった。また、「社会志向性 N」の偏回帰係数は、 $(\beta)=.198(t(259)=2.64, p<.01)$ であった。したがって、友人関係満足第5因子「関係維持満足」に及ぼす影響は、信頼感第1因子「他者信頼」、第3因子「相対的自己信頼」、「社会志向性 N」においてのみ有意であった。なお、このときの回帰式全体の説明率は、 $R^2=.07$ であり、有意であった($F(7,259)=4.04, p<.001$)。

考察

以上の結果から、信頼感および個人志向性・社会志向性の、友人関係満足に及ぼす影響について、主な結果を中心にみていく。

第一に、被験者全体を対象とした分析結果から、信頼感第1因子「他者信頼」および「社会志向性 P」は、友人関係満足第1因子「意志疎通満足」、第2因子「相互的受容・理解満足」、第4因子「関係距離満足」においてのみ正の影響を及ぼしている。

これらの3つの友人関係満足の因子内容は、互いに冗談を言い合ったり、受容・理解し合ったり、互いのペースを守ったりというように、「一方的」に“する”ことによる満足、あるいは“される”ことによる満足ではなく、友人と「相互的」に行うことにより得られる満足についてであるといえる。このことから、「他者信頼」や「社会志向性 P」は、友人との関係の相互性による、友人関係満足を得ることにつながりやすいと考えられる。

第二に、信頼感第3因子「相対的自己信頼」および「社会志向性 N」が友人関係満足第5因子「関係維持満足」に正の影響を及ぼしている。さらに男女別にみると、女性においてのみ、このような影響がみられている。

「相対的自己信頼」が「関係維持満足」に正の影響を及ぼすことについてみていくと、「相対的自己信頼」は、自己信頼を得るために比較対象が必要になり、相手がその対象である場合、その相手との関係にこだわってしまいやすいのではないだろうか。一方、「社会志向性 N」が「関係維持満足」に正の影響を及ぼすことをみていくと、「社会志向性 N」の困ったことがあればすぐに他者に頼るなどの特徴が、側に頼れる相手がいることを望みやすくさせ、関係を保とうとすることにつながりやすいと推察される。したがって、女性において「相対的自己信頼」および「社会志向性 N」が強い場合、友人関係を

保つことを重要としていることが推察され、「相対的自己信頼」と「社会志向性 N」が「関係維持満足」につながったのは、このことによるものと考えられる。

第三に、信頼感第 2 因子「自己信頼」および、「個人志向性 P」、「個人志向性 N」の、友人関係満足への有意な影響はみられなかった。このことから、「自己信頼」や、個人志向性は、それが肯定的振る舞い、否定的振る舞いにかかわらず、友人関係満足にはつながりにくいことが示された。このことから、友人関係満足の直接的関連の要因になりやすいのは、「他者信頼」や、社会志向性といったように、他者に向かった気持ちや振る舞い方が、より重要であると推察される。

まとめと今後の課題

本研究では、南 (2014) から、友人関係満身に影響を及ぼす要因として明らかにされた信頼感および個人志向性・社会志向性を取り上げ、これらが、友人関係満身に及ぼす影響を、段階的に調べた。まず、友人関係満身に影響を及ぼす要因同士である信頼感と個人志向性・社会志向性との関連を明らかにした上で、次に、信頼感および個人志向性・社会志向性が、友人関係満身に及ぼす影響について検討を行った。また、それらの影響が、性別によって異なることが示唆された。

今後は、信頼感および個人志向性・社会志向性の友人関係満足への β 係数が低かったことから、信頼感尺度および友人関係満足尺度(姜ら, 2014)の項目を、より詳細に検討することが必要であろう。それをふまえた上で、友人関係満身に至るプロセスを、性別による検討を含め、より明確にしていくことが望まれる。

また、上述したような友人関係満身に至るプロセスおよび友人関係満身の精神的健康への影響を調べることにより、精神的健康に至るより詳細なプロセスについて、今後、検討していくことが望まれる。このことにより、精神的健康のメカニズムの示唆を得ることができると考えられる。その際に、以下のことを考慮に入れるべきであろう。

本研究の研究 2 の結果において、信頼感第 3 因子「相対的自己信頼」および「社会志向性 N」が友人関係満足第 5 因子「関係維持満足」に正の影響を及ぼしていることが示された。ここで、「相対

的自己信頼」、「社会志向性 N」、「関係維持満足」が精神的健康にどのように関連するか考察していく。他者に対してネガティブに振る舞う「社会志向性 N」は、精神的健康に望ましくない影響を及ぼすことが推察される。そこで、「社会志向性 N」が正の影響を及ぼしている「関係維持満足」や、「社会志向性 N」と同様に「関係維持満足」に正の影響を及ぼしている「相対的自己信頼」も精神的健康において、マイナスに働く可能性が予測される。

一般的に、友人関係満足や自己信頼を得ることは望ましいことであり、様々な面でポジティブに働くことが考えられる。しかし、本研究では、たとえそれを得ても、精神的健康にネガティブに働く可能性のある因子が見出され、友人関係満足および信頼感の得られ方が、精神的健康に深く関連してくることが示唆された。

したがって、今後は、友人関係満身の得られ方やその内容、また、信頼感の中でも「相対的自己信頼」のような自己信頼の得られ方などを考慮に入れた上で、精神的健康との関連について、検討していくことが望まれる。

参考文献

- 天貝由美子 1995 信頼感の類型とその発達の形容—高校生を中心に— 日本教育心理学会第37回総会発表論文集 p.493
- Folkman, S., Chesney, M., McKusick, L., Ironson, G., Johnson, D.S., & Coates, T.J. 1991 Translating coping theory into an intervention. In J. Eckenrode (Ed.), *The social context of coping*. New York: Plenum Press. 239-260
- 伊藤美奈子 1993a 個人志向性・社会志向性尺度の作成及び信頼性・妥当性の検討 心理学研究 第64巻 115-122
- 伊藤美奈子 1993b 個人志向性・社会志向性に関する発達の研究 教育心理学研究 第41巻 第3号 293-301
- 伊藤美奈子 1995 個人志向性・社会志向性 PN 尺度の作成とその検討 心理臨床学研究 第13巻 39-47
- 伊藤美奈子 1993;1995 個人志向性・社会志向性 PN 尺度 (堀洋道監修/山本眞理子編) 心理測定尺度集 I—人間の内面を探る〈自己・個人内課程〉株式会社サイエンス社 129-133

- 姜・南 2014 信頼感が友人関係満足に及ぼす影響についての検討 富山大学紀要
- 黒田祐二・有年恵一・桜井茂男 2004 大学生の親友関係における関係性高揚と精神的健康との関係—相互協調的-相互独立的自己観を踏まえた検討— 教育心理学研究 第45巻 第1号 24-32
- 松永真由美・岩元澄子 2008 現代青年の友人関係に関する研究 久留米大学心理学研究 第7号 77-86
- Maybery, D.J., & Graham, D. 2001 Hassles and uplifts: Including interpersonal events. *Stress and Health*, 17, 91-104
- 南朱里 2014 友人関係満足に影響を及ぼす要因についての検討 —信頼感および個人志向性・社会志向性を中心に— 富山大学人間発達科学部卒業論文
- 長尾あゆみ・笠井仁・鈴木伸一 2003 青年期の親子関係と友人への依存性に関する研究 広島大学大学院心理臨床教育研究センター紀要 第2巻 p.22-35
- 岡田涼 2008 親密な友人関係の形成・維持過程の動機づけモデルの構築 教育心理学研究 第56巻 第4号 575-588
- Seiffge-Krenke, I., & Shulman, S. 1993 Stress, coping and relationships in adolescence. In J. Sandy & R.T. Hector (Eds.), *Adolescence and its social worlds*. Hove, England: Lawrence Erlbaum Associates. 169-196
- 谷冬彦 1996 基本的信頼感尺度 (堀洋道監修/山本眞理子編) 心理測定尺度集 I —人間の内面を探る〈自己・個人内課程〉株式会社サイエンス社 72-75

謝辞

本研究を実施するにあたり、調査にご協力してくださいました富山大学の先生方、また多くの学生の皆さまに、深く御礼申し上げます。

(2014年5月19日受付)

(2014年7月9日受理)